
音にのせて

枝豆

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音にのせて

【Nコード】

N4418A

【作者名】

枝豆

【あらすじ】

音にのって、わたしの思い。あなたの元へ

前奏

音にのって、私の思いもあなたのもとに。

大好きな君の答えも、音にのせて。

みんなの思いが、音にのって私のもとに届いたら、こんなに嬉しいことはない。

音は、何でも生み出せる。伝えられる。

音と音が、響きあい、つながり一つの「曲」となる。

あなたの胸にも、届いてほしい。

私の思い。

私の生み出す音にのせて、みんなで作り出す曲にのせて。。。

前奏（後書き）

連載を始めます。

感想・評価お待ちしております。

入部

音楽って素晴らしい。

楽器で、音を鳴らすのってとても楽しい。

初めて私が手にした楽器、それはよくジャズなどで使われているサックス。

音楽が、こんなにも楽しいなんて。しかも、このサックスはなんてきれいな音を鳴らすんだろう。

私は、幼稚園からピアノをしていた。最初は音がでるのが楽しかった。私と音楽との初めての出会い。

「この音は、私がここから出してあげたんだ。閉じ込められた、この音を。」

小さい私は、勝手に思っていた。でも、小学生になりピアノの先生に注意されることが増えた。

「ここは、そうじゃないでしょ！！こう弾くのよ。」

同じ事を、何回も注意されるようになった。何回練習してもできないもどかしさ。

先生の言葉への恐怖。そして、両親の冷ややかな目。小学生の私には、耐え切れなかった。

怖い。

その一言だった。全てが怖い。練習してももうまくならない。

先生の目にはもう、あきらめの色が浮かんでいた。両親が顔を直視することが、できなかった。

ピアノは、中学校に上がる前にやめてしまった。

中学校の入学式。入場曲が鳴りはじめた。CDじゃない。テープじゃない。ピアノ伴奏でもない。テープみたいなか細い音じゃない。

ピアノのような、静かな、小さな川のような音でもない。もっと厚い、もっと熱い。人の思いが伝わってくる。ピアノでは、表現できない重みが伝わってくる。あの、音は何だろう？？

私は、音が出てきた場所を見た。入学式をしている体育館の隅。みんなの邪魔をしないように、ぎゅうぎゅうになつて演奏している。でも、1人1人が、一生懸命に吹いていることが分かる。顔は真っ赤だ。

演奏が終わり、入学式自体も終わった。体育館の隅を見ると、そこにいる1人1人の顔に満足そうな、表情が浮かんでいた。

私は、あのときの音を忘れられなかった。機械では表現できないあの音を、ピアノでは伝えられないあの気持ち。私は、入部届けをもらった次の日にはもう、名前を書き印鑑を押し、部活動の所には「吹奏楽部」の名前を書き、担任の先生に渡した。

これが、私と吹奏楽部との出会い。私と本当の音楽との出会い。

出会い

私は、吹奏楽部に入部した。

私は、あの音に惹かれて入部したのだが、楽器一つ一つに特徴があることが分かった。

一番最初に目があったのは、太鼓やシンバル、ドラムが並ぶ打楽器軍団。

（正式にはパーカッションというらしい。）

一番場所をとっていて、一番音が大きかった。パーカッションとひとくくりにできないほど、いろんな楽器があり、いろんな音が響いていた。

でも、私を感じたあの音の響きは、ここにはなかった。

トランペット、クラリネット、フルート、チューバ、ユーフォ、ホルン、いろんな楽器を触らせてくれた。音も聴かせてくれた。しかし、私を感じたあの音はなかった。

私は、まだ吹いていない楽器を見渡した。トロンボーン、ピッコロ、サクソ。私はなんとなく、サクソを手にとった。

吹いてもらったその音といたら、なんて艶やかで、妖しい雰囲気、を、音から感じる。でも、それだけじゃなくて木管楽器独特の、温かくも感じる。私は思った。

「この楽器だ。あの音は。」と。

でも、いくら私がこの楽器をしたいからといって、自分で決めることはできない。

先輩たちの意見を聞き、先生が決める。私たちの意見も聞いてもらえるが、優先されるのは、

先輩たちの意見。先生の意見。

私は、願う。あの楽器が吹きたい。絶対に。

そして、自分の楽器が発表される時がきた。

「幸村さち、アルトサックス。」

思わず叫んでしまった。

思わず泣いてしまった。

思わず涙した。「たった、こんだけのことなのに」と、人はいうかもしれない。

私には、「それだけ」ではなかった。

これが、私とサックスの出会い。

私の、一生の友たちとの出会い。。。。

友だち・・・？

私の楽器は、アルトサックスに決まった。

アルトサックスとは、よくアメリカのジャズで使う楽器だ。だが、オーケストラには出てこない。教科書にすらでてこない。クラリネットも、フルートも、チューバも、ホルンも出てきているというのに。。。

・・・・・・

私は、それからいろんなサックス奏者の、CDを買い集めていた。管楽器は、作音楽器といって、またと、同じ音を出すことはできない。作り出すことはできない。だから、あんな音になるんだろう。あんな気持ちののった音に。

私は、がんばった。一生懸命練習をした。誰よりもうまくなりたい。そう思っていた。同級生よりも、先輩よりも。

1年生で吹奏楽部に入ったのは、男子3名 女子5名 計8人だった。田舎にあるこの中学校は、全校児童が200人もいない。クラスも2クラスずつだ。先輩は、「8人も入ってくれて嬉しい」といっていた。

私はクラスで、部活でどんどん友達を作っていた。

特に仲良くなったのが、ユーフォニウム担当 さねだきはがね 實咲鋼。名前だけ聞

くと男の子だが真正正銘の女の子だ。性格や、筋肉のつき方は男の子以上かもしれない。

フルート担当 さかいねち 阪井那智。か細くて、思わず守ってあげたくなる。

そんな感じの女の子だ。フルートを持つと様になる。男子からの人氣も上々らしい。

ちなみに、私は幸村さち。鋼に言わせれば、私も十分男の子以上だという。

「さちは、力は私より無いかもしれないけど、痛いところついてく

るからねえ。さちと、本気で喧嘩したくない。」

私は、本気で喧嘩したことはない。だって、本気で喧嘩したら普通の女の子、いや男の子でも怪我させてしまう。綱ぐらいしか、本気で喧嘩なんかできない。

そしてもう一人。

垣 慎。^{かきしん} 同じクラス。同じ部活。トロンボーン担当。

男子の中で、唯一緊張せずに話せる相手。まだ好きかどうかは、わからない。

でも、未だ男の子を好きになったことが無い私が、気になっている相手。

垣 慎。私は、この名前を一生忘れないだろう。

音が、私の気持ちまで表現してくれたらいいのに。。。。

テスト

入学して、初めての中間テストがやってくる。

「。。。。。」

やばいやばいやばいやばい。

私は、一人じゃ集中力がすぐ途切れてしまう。だから、小学生のときはほとんどテスト勉強なんてものやったことが無かった。

そんな私が、中学校に入ってからこの勉強方法(?)を変えることができるわけも無く、とうとう、テスト3日前となってしまうた。。

。。もちろん、テスト期間中部活は休み。

私は、全ての事に無気力になりつつあった。

「鋼、那智、助けて。。。」

「死にかかってるね、さち」「死にかかってるね、さち」

綺麗なハモリで返ってきた。少しの焦りも感じさせない、綺麗な声で。

鋼も那智も、見かけとは裏腹に(こんな事いたら、鋼に殺される)

二人とも頭がいい。

二人とも、いきなり不良とかにならない限り、この二人は上位確実。。

それに比べて私は。。。

やばいやばいやばい。

ここはもう、

「鋼、那智勉強教えて」

「はあ?!嫌です」。お前なんかに教えるの!!」

「鋼、いいじゃん。さちが勉強しようって気になってるんだから」
「そうそう。今までの私ならもう諦めて、カンニングしてるよ。」
「それは、いけないと思うんだけど。。。」
「そう思うよね、那智。だからさあ、鋼と那智、勉強教えてよ。」
「ねえ、那智。思うんだけどさ。吹奏楽部の一年生ってさ、馬鹿ばっかりだよな。」
「鋼、そんな事言っちゃいけないと。。。」
「それなら、那智はどう思うのさ??!!」
「えっ!!.....」

「おい、那智そこで黙っちゃいけないと思うんだけど。。。」
「そうだ、そうだ!!」

いつの間に来ていたのだろう。後から、慎の声がした。

「慎もさ、仲間だよね!!私の!!」
「はあ??!!お前よりマシだし!!」
「何を??」

「また始まつてるよ、お母さんとお父さんの喧嘩。」
「本当に仲いいよね。さちと、慎。」
「仲良くない」「仲良くない」

「ほら、息もピッタシ!!」

キンコーン・カンコーン

「またいい具合に、チャイムが。。。」

そのほかの男子たちも！！????

あの部屋に、女子はともかく男子も入れるの????

「いやいやいやいや、私の家で??」

「もちろん。それ以外場所無いもん」

「そんな言われても。。。」

「だめ。いくらなんでも、今日はかわいそうだから、明日みんなで行くよ」

「え、そんな。。」

「それじゃ。また明日。」

「鋼、そんな。。。」

明日は、土曜日。

今日は、徹夜だな。

私は、小さくため息をついた。

勉強会

今日は、土曜日。

現在朝の6時。眠い。思っていた通りに徹夜をすることになった。

「やっぱり、みんな来るのかな。。。」

いつの間にか唇から漏れた独り言。

私の部屋は、とても女の子といえないほど散らかっている。
だから、滅多に人を中に入れない。

那智も鋼も私の部屋に入れたことは無い。

こんな部屋に那智や鋼でも抵抗があるのに、何で男子たちも入れなきゃいけないんだろう。

「鋼のせいだ、鋼のせいだ、鋼のせいだ。」

私は鋼を恨みながら、部屋の掃除を着々と進めていった。

数時間後。

「こんにちは。失礼します。上がるねさち。」

今日は、家族は誰もいない。お父さんは仕事に出かけ、お母さんと妹たちはおばあちゃんの家で、農作業を手伝いに行ったらしい。何も言わず、置手紙だけ置いてあった。悲しいよ、お母さん。

「本当にきたよ。あの人たち。。。」

私は、寝不足のせいで変なテンションのまま、鋼達を迎え入れた。

「…………。何だ全然きれいじゃん、さちの部屋。」

鋼の声。いつもより遠くで聞こえる。

「頑張ったんだよ。徹夜で。」

自分の声じゃないみたい。

「さち、大丈夫？目の下に濃いクマができてるけど。。。」

これは誰？？

「……………！那智の声だ。初めてだよ、那智のあの独特な声がわからないなんて。」

「よし。んじゃ、みんな揃ったことだし、勉強会を始めますか！！」
みんな来たんだ。女子も、男子も。

みんなが鞆から勉強道具を取り出している。ワークを広げ、筆箱から鉛筆を取り出し、問題を解いている。全てが、私と関係の無い世界の音のようだ。

「ちよつ、さち！！どうしたの？？！！」「ちよつ、さち！！どうしたの？？！！」

鋼と那智の、見事なハモリがどんどん遠のいていく。。。

それから誰かに持ち上げられたような感覚を感じ、

「じゃあ、後よろしくね……。」「眠らせてあげてね」

鋼と那智の声を聞きながら、いろんな足音を聞きながら、私は深い眠りへと入っていった。

空が、夕焼けに染まるころ。私は、目を覚ました。まだ頭ははつきりせず隣にいる相手が誰かを判断するのに、少し時間がかかった。

慎だ。私の顔のすぐそばに、慎の顔がある。私は、その整ったとはいえないが、私が思わず緊張してしまう横顔を、じっと見つめてい

た。

不意に、慎が目を開けた。まっすぐな目。いつものふざけた目じゃない。真剣な目。

口が動く。唇の動きをよく見る。

「す……き……だ……?」

そっぴったの??

今度は、声によって、音によって、慎の気持ち伝わってくる。
「お前のことが好きだ」

今まで、言われたことのない言葉。

「すき」

初めての言葉。生まれた初めての。

私と慎は目をそらさないまま、妙な雰囲気か二人の間に、漂っていた。

勉強会（後書き）

いかがでしょうか？

感想・評価など、お待ちしております。

間奏（前書き）

慎の告白を受けた、さちのとり行動は????

間奏

初めて聞いた、異性からの言葉。

声にのって、音にのって、相手の口から感情が出てくる。

嬉しい、怒っている、哀しい、楽しい。

音にのって、みんなの心に届く。

その感情が、みんなのためじゃなく、私のためだけに。

私へと、向かって言われる。

あなたの、精一杯の気持ち。

私へと届く。

それに私が答えられるかは分からない。

私へのあなたの気持ちがいつ冷めるかも分からない。

でも、でも、私は今のこの気持ちを大切にしたい。

声にのせて、音にのせて。

私の心から、あなたの耳へ。

.....。

今頃、気付いたよ。

私は、あなたが好き事だつてことに。

あなたの言葉が、私の胸に。

響いて響いて、この感情に気付かせてくれた。

大好きだよ。慎。

でも、ちょっと待ってて。

あなたの気持ち、本当であることを信じたいから。

あなたが、私に飽きないように。

いつまでも、あなたが私を好きでいてくれるように。

あなたの、その告白への返事はちょっと待って。

少しだけ、少しだけ、時間をおこつ。

もし、この間にあなたが私を嫌いになつても、

私は、あなたをそれほど恨まないですむから。

大好きだよ。慎。

私は、あなたのことを嫌いにはならないから。

なれないから。

少しだけ、本当に少しだけ、時間をおこつ。

1年後の今日。私は、あなたに返事をします。

それまで、あなたが私を好きでいてくれますように。

あなたが、1年後も私の隣にいてくれますように。。。。

あなたの笑顔を、誰よりもそばで見られますように。。。。

あなたの、音がいつまでも聴いていられますように。。。。

嘘

土曜日の出来事から、2日後。

今日は、月曜日。嫌でも慎と顔を合わせなくてはいけない。

私は、昨日必死で出した言葉を慎に伝えることにした。

「慎、今日部活終わったらちょっと待ってて。」

「おお。」

慎が言葉を発した直後、私は鋼に、慎は同じ吹奏楽部の双^{そう}に、教室から連れ出され、

私は、トイレの近くまで引つ張られていった。

「今日のお前ら絶対おかしい。土曜日私たちが帰ってから何かあったでしょう?？」

また、あの色が浮かんでいた。あの悪がきの色が。

「何も無いよ。それより、何で土曜日は。」

「嘘をつくな!!絶対何かあったでしょう?？ほら、ささつと言いなさい!!」

鋼が興奮してきたのが分かる。いつもより、鼻息が荒い。

それに、喋りも早くなってきた。

「ええっと、別に何も。」

「いや、あった。ほら早く!!」

やばい。鋼ににらまされると(?)この恐怖から逃れたくて思わず口が滑りそうになる。

もう、ここはあの手で行くか。

「鋼、実はね。」

「うん、うん。」

鋼の嬉しそうな顔、慎ごめん。

「慎からさ、恋の相談を受けて。。。」「

「ええええええ！！慎は、てつきり。。。」「

その後は、言わなくても分かった。たぶん、いや100%、

「さちの事好きなんだと思ってたんだけど！！」「
だろう。」

鋼の口が動く。

「さちのこと好きって、ずっと思ってたんだけど！！」「
あ、惜しい。99%。」

「そんな事言われたって、本当にそう言ってたんだって！！俺は、
あの子が大好きだって。」

「ってことは、名前も知ってるの？？そんな話までしたんだから、
もちろん聞き出してるよ　ね。」

もうすぐ、授業が始まる。でも、名前を言うまで私を放してはくれないだろう。

「そんなに、知りたいの??」「

鋼は、首を縦に大きく動かす。女の子ってこういう話好きだよな。

「えっとねその子の名前は。」ごめん、本当にごめんね。

鋼の視線が私の唇へと集中している。声が音が、目で見えるかのように。

「那智」ああ、言ってしまった。声に出して。音と共に。

「マジ！！？身の程を知れ慎！！」

鋼の目が、きらきらしている。

やばい、もつといろいろ聞いてくる目だ、これは。

キンコーン・カーンコーン

「あ、もう授業始まっちゃうし、行こうさち。」

何とか切り抜けられた。助かった。

「ねえ、さち」鋼が言う。

「慎の恋、応援してあげようね」

そのとき、私は、なんともいえない感情に襲われた。

今、鋼の前で「慎は、私が好きなの！！」と叫びたくなった。

私は、数学の授業中ずっと考えていた。その感情にピタシな言葉を。

「やきもち」「嫉妬」

こんな言葉が頭の中を駆け巡る。

私はとんでもない失敗を起こしたことに、まだ気付いていなかった。

嘘（後書き）

感想を下さった方、ありがとうございます。

「音にのせて」最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

真実

キーン・コーン

やっと終わった。忘れていたがこの時間はテストだった。休み時間最後の詰め込みをしていなかった私は散々な結果で終わった。

「大丈夫！次がある！！」

私は、次の英語のテストへ向けて教科書を開いた。

「さち。ちよつと来て。」

私は、鋼の大きな手でまた連れ出された。今度は那智も一緒だ。

「那智、そんな所で見てないで助けてよ。」

「そう騒がない。今度は、那智からさちを呼んでくるように言われたんだもん。」

「は???！どうしたの那智??」

「えつとね、鋼から聞いたんだけど、慎君に好きなひといるって本当?」

「はっ?・・・鋼ちよつと来て。那智ちよつと待っててね」

「なに?」

「なに?。じゃないよ。どこまで那智に話したの??まさか名前まで言っただんじやないでしょ うね!」

「そんなに怒るなよ。大丈夫、名前は言っただけから。」

「本当でしょうね。」「本当、本当。」

「鋼、あの反応からするともしかして那智ってさあ。」「うん、慎の事好きだよ。」

予想はできた。顔を真っ赤にして、いつもおとなしい那智が慎の好きな人なんてくだらないことを聞くはずが無い。でも、信じられない

かった。あの那智が、慎を好きだなんて。

那智が相手だと勝つ気がしなくなる。那智はかわいい。男子からの人気もすごい。

それに、本当にいい子だ。

それに比べて私は。。。

「ちょっと、さち。那智一人残してきたまんまだよ。」

「うん。鋼悪いけど、那智には慎の好きな人教えないでね。」

「え、何で。那智せっかく両思いなのに。」

「いいから！私先教室戻ってるね。」

「え、ちょっとさち！！」

私は、教室には戻らなかった。一人になりたかった。

誰ともかわりたくなかった。

私を知ってしまった真実。

那智が慎を好きだという事。

慎を那智にとられてしまつかもという事実。

真実（後書き）

こうゆう展開を経験したことが無いので、さち達の気持ちを想像してかきました。評価や感想をお待ちしています。

決心

私は、屋上へといった。この時間は、教室で勉強をしているはずなので、誰もいないと思ったからだ。ところが。。。階段を懸命に駆け上り、息を上げながら屋上の扉を開けると。。

「はけ慎!!」

「ぜってえやだ。あつ!!」

「言えよ!!・・・こんにちは、さちさん。」

「さん付けはやめて。それに明らかに怪しいよ、その格好」

男同士顔を鼻と鼻がくっつき合わせ、慎が逃げないように手をしっかりと握っている。

男女なら何の違和感も無いのだろうが、男同士でやるといけないものを見たような罪悪感に襲われる。

「いや、これはだな。」

「いいよ。何も言わなくて。場所変えるから。」

「いや。もう俺ら帰るから。なあ」「うん。俺ら勉強しなきゃ。」

「分かりやすい。」

逃げるように階段を下りていく二人の背中を見ながら思った。

思わず、顔がにやける。私はあの人に告白されたんだと思うと、顔が緩む。

さっきまで、泣きたかったのにいつの間にか笑っている。

「はあ。」

私は思い出す。那智が、慎を好きだという事。

もし、那智に「私も慎が好き」と言ったらどうなる??

今まで、仲良くやってきたのに、それが崩れてしまう。

鋼に言ったらどうなる?? 鋼には、「慎是那智が好き」と言ってしまった。

「はあ。」 2度目のため息。

・・・・・・ 5分経過。

「よし。鋼には正直に言おう。」

私が、生まれて初めて授業をサボり出した結論。

鋼には言おう。そしてどうしたらいいか、一緒に考えてもらおう。

「なら、最初っからそうしとくんだった。」

私は、教室に急いで向かった。

この時間は、英語のテストだった。

先生に怒られ、テストの結果も最悪だったが、

私は、次の休み時間の鋼の言葉を考えると少しだが、気持ちが一瞬軽く
なった気がした。

決心（後書き）

10話目です。初めてです。
まだまだ続きそうです。
頑張ります。

鋼へ

英語のテストも終わり、もう今日のテストはない。明日もない。中間テストが終わった。

部活も今日から、復活だ。

次は給食で、この学校の変った時間の一つだ。この学校の給食はお弁当のようになっていて

学校内なら、どこでも食べていいという事になっている。

私は、生徒が行きかう廊下を一人だけ流れに逆らい歩いていった。

鋼を連れて。

「なんだよ。今日の給食は、ハンバーグだぜ?! 慎たちに食べられるだろ!」

とか、なんとか言っていたと思う。でも、私の頭の中にはどんな言葉で私の気持ちを伝えようと空っぽの脳みそを一生懸命使っていた。

もう定番となったトイレに連れ込み、土曜日に起きたことと、私がどのような返事をしようと考えていること。そして、なぜ今鋼に伝えようとしているのか。

鋼は、私がしゃべっている間終始無言だった。

「さち。一つだけ聞いていい?」

最後の最後。私がしゃべり終わった後、鋼が言った言葉。

「さちは、それでいいの??? 1年も同じ人を好きでいられる確率なんてほとんどないよ? そのうち、那智以外の女子にも告白されるかもしれないよ? それでもいいの?」

鋼は大人だ。いろんなことを知っている。鋼のいう事は信じてもら

い。

でも、私は。。

「・・・いいよ。ただか1年で嫌われるようじゃ、たとえ付き合っても長く続くわけ無いじゃん。例え、両思いだとしても。。」

「

私が、必死で悩んで出した答え。それでいいと思った。今、「好き」という気持ちがあったとしても、3日後それが消えていたら意味がない。好きな人にはずっと好きでいてもらいたい。その思いが、私にこの決断をさせた。

「わかったよ。私はどちらにも力は貸さない。自分でがんばれよ。」
鋼は、そう言ってくれた。

「私なら即OKするのに。。さち、お前が羨ましいよ。」
とも、こぼしていた。

私は、この後那智と普通に話すことができた。那智には、本当のことを悟られないように細心の注意をしながら。那智の態度からすると、まだばれていないらしい。
私の心の内側は。。

鋼に本当のことを言えて、私はいくらか楽になった。

鋼がいなかったら、私はどうなっていただろう。。想像できない。

鋼、ありがとう。

そういえば、鋼に好きな人はいないのか？？

いたら応援してあげたい。いつもはぶっきらぼうの鋼だがとっても可愛い女の子だ。

鋼に、帰るとききいておこう。

私は、鋼への感謝の気持ちと、鋼への新たな興味を給食を食べているとき、感じていたのであった。

鋼へ（後書き）

次回は鋼のことについて書こうかと思っています。
読んでいただけると嬉しいです。

鋼、女の子になる（前書き）

「音にのせて」の鋼の物語です。
恋愛ですが、笑いの要素も含んでいます。

鋼、女の子になる

私の名前は、鋼。

ある田舎の中学校に通う中学１年生だ。

私の、友達は今青春真っ只中だ。

さちも那智も、好きな人がいる。

さちは、たぶん両思い。（本人は何も言っていないが）

那智は、片思い。（私はたぶん失恋すると思うが。。。）

さちが、何も言っていないのは友達として少し悲しかったが、今日嘘をつかれないでよかったと思う。

ただ、さちに言っておこう。

嘘はつくなど。　　すぐに嘘についていることばれてしまうから。

「やっぱし？さち嘘ついてたんだ。」

「・・・いつの間に人の心呼んでるんだよ！！」

背後にいたのは、草野くさの双そう。

中学校に入り、何でも気軽に話せる唯一の男の子だ。

そんな彼にも言えないことがある。

それは、男らしい私に好きな人がいると言うこと。
それが、君だということ。

那智は可愛い。お嬢様のような女のコ。

さちも可愛い。自分で気付いていないが内面から美しさがにじみ出ている。

私は???

とても、可愛いとはいえない。筋肉が二の腕につき、誰にも言っていないが腹筋も割れていたりする。

髪も短く、寝癖がついてたままのことがよくある。

しかも、朝は眼が究極的に垂れて、垂直になっている。
まったく困ったものだ。

これでは全く、パンダではないか。

そのうち、フサフサとした毛が生えてきそうな勢いだ。

とよく人に言われる。だがこんな動物のような私でも恋をするのだ。
私はこのことを誰にも言っていない。

もちろん、さちにも那智にも。

言えるわけがない。普段、あんなに男っぽくしている手前、今更こんな乙女チックなことが言えるはずがない。

さちや那智を信用していないわけではないが、言ったらやっぱりお前も女だったんだな、という微笑みを浮かべられそうで・・・。

そんな顔を向けられては、恥ずかしくて死んでしまいそうだ。
顔から火がでるところではない。

その火で、山火事を起こせる、と思う。

まあ、現実逃避はこれぐらいにして・・・。

とにかく私は双が好きなのだ。

これは紛れもない事実。

うわ・・・自分で言っというて死ぬほど恥ずかしい。

それにプラスして、あまりのキモさに吐き気がしてきた。

いつから私はこんなに乙女チックになってしまったのだろうか・・・。

というか、いつの間にか私の性格はコメディアンっぽくなっている。

一応、それでも頭を良い方なのに・・・。

私はこのまま進学校に駒を進めることができるのか・・・。

というぼやきは置いて、私がなぜ双を好きになったのか。

その理由は・・・。

ありがちだが、入学式の日には学校の中で道に迷ってしまった私を
なんだかんだ言いながら、体育館まで案内してくれた。

双は、顔はかつこいいとはいえないが、私にはクラスの誰よりもか
つこよく見える。

・・・。。

・・・。。

私は、どうかなってしまったのだろうか？

こんな言葉が、出てきてしまうなんて。。。。

一回精神科に行ったほうがいいのかも说不定。

「・・・お前何百面相してるわけ??」

「えっ、いやいやいやいや。」

「お前って、天然??」

「いやいやいや・・・んなわけあるかああ!!!」

私の強烈な左フックが双のボディに炸裂した。

双が、数メートル先までぶっ飛んだ。一応手加減したつもりだったんだけど。。。

こんな私に彼氏なんかできるのだろうか???

いやいや、どう考えても無理だ。

まだ可能性がある子なら、今すぐ双に駆け寄って、

「大丈夫?」

ぐらい言うだろう。

だが、私の頭には端からそんな考えが浮かんでこない。

この時点で私はもう終わっている。

「いつてえええな。お前、こんなか弱い俺になに強烈なフック食らわしてるんだよ」

「・・・・。」

「おい。何本気で落ち込んでるんだよ。お前らしくねえよ。」

「悪かったなあ。どうせこんな私には彼氏なんかできねえよ。」

「んなわけねえだろ。・・・そんなわけないよ。」

「はっ？お前何言ってるんだよ。お前が一番私の性格知ってるだろ？」

「うん、知ってるよ。男勝りで、大雑把。力なんか男の俺よりあるし。。。」

やっぱり、双も私のことそんな風に思っていたんだ。

「でも、誰も見ていないところで楽器の練習ががんばっている姿とか、友達の相談に親身になって聞いてあげるところとか、誰よりも優しいところとか、可愛いところとか。俺は、お前が気付いていない、女の子らしいところを沢山知ってる。」

双は、いきなり何を言い出すの？こんな私が可愛いとか親ばかな私の親しか言わない言葉。

最近では、「可愛い」よりも「かつこいい」が増えてきたのに。

「鋼」

双の今まで見たことのない真剣な顔。

私の思考は停止している。

双の顔が、今までにないほど近づいてくる。

端と端が触れ合うほどの近さに大好きな双の顔がある。

「鋼、俺はお前が好きだ。お前を誰にも渡したくない。」

双、ソレはいいすぎだ。何をいきなり言い出すんだ。

ウザイよ。キモイよ。ありえないよ。

でも、そうは思っていて顔はほころんでしまう。

だって、アナタガチュキダカラ。

すいません。かみました。改めて

あなたが好きだから。

「鋼は、俺のこと好き？嫌い？？」

そんな、双に向かつて言えるわけないじゃない。

私は、真正面にある双の顔を見た。顔が真っ赤だ。

その顔を見ると、

「私も、双が好き。。。」「

思わず口をついて出てしまった。

一気に、双の体が私の体に近づく。

「マジ！！？？本当に？？」

「うん。。。」「チュキ」

「チュキ？」

「いやいやいやいやいや、なんでもないし。」「

「俺聞きたいなあ。その言葉」

「はあ？言えるわけないだろう。恥ずかしくて死ぬ。」「

「そこを何とか。お前の口からもう一回聞きたい。」「

「。。。好き。」「

「鋼えええ。お前、可愛すぎ。」「

双、お前の目はとうとう腐ってしまったんだな。

「そんなわけないだろ。俺の視力は2・0だ。」「

またこいつは、私の心を。。。。

（こいつに、キスしたい）

「。。。双口は嫌だ。」「

「は？俺何も言っていない。」「

「・・・」

私は、顔が真っ赤になっていった。

私を抱きしめる力が強くなる。

今、こんな風に抱きしめられて気付いたが、双は私より身長が高かった。

私は、いつの間にか目を閉じていた。

おでこに、温かい感触。

私がつくりして目を開ける。

そこには、双の真剣な顔。

どんどん、近づいてくる。

時間にして、数秒。

いつの間にか、私の唇に双の唇が。。。

長かったような気がした。

でも、本当は一瞬で。。。

これが私の初めてのキス。

大好きな、大好きな彼氏・双との物語の1ページ。

私も、とうとう彼氏ができた。

誰よりも、誰よりも大好きな人が。

双と鋼の物語はまた今度。。。

鋼、女の子になる（後書き）

いかがだったでしょうか？

これは、ある人との合同作品です。
笑いの部分は、一緒に考えました。
いつかまた、合作をしたいと思います。

決心

最近、鋼がおかしい。

結局、鋼に本当のことを聞けず一週間が過ぎた。

一週間の間、鋼はどんな可愛くなっていた。

でも、私はそのことを信じられなくて、信じたくなくて。

だって、あの鋼が、あの男の子を簡単に投げ飛ばす鋼が、最近妙に女の子らしい。

なんていえばいいかわからないけど、見かけよりも内面が綺麗になったようだ。

鋼が、ぼーっと見ている視線をたどると、そこには草野がいて私が見ていることに気がつく。

顔を赤らめる。

私は、鋼が何も言わないことがもどかしくて、なぜか不安になって、でも何も言えなくて

私たちは、なぜか今までどおりの関係を保っていらなかった。

でも、私は心のどこかでは「草野のことを気になりだしている」とか「好きになり始めている」とか、今までの鋼では、想像つかなかった答えを出していたが、私は信じなくなかった。

だが、結局本当のことを聞くことになる。

それは、本当に「想像を超えたもの」だった。

「私、双と付き合ってる。。。。うわ、うわ」

鋼、それは自分で言うなよ。

私はそれだけ言うと、倒れこんだ。

私が、目を覚ましたのは昼休みも、終わりに近づいたころだった。

「さち、生きてる?？」

慎の優しい声。私は、顔が赤らんでくるのを感じていた。
「うん。何とか。」

「に、しても驚いたよな。」

「あの二人が付き合いだしたなんてさ。」

「ほんとうだよ。真面目にビックリしたし。」

「それにさ。。。」

彼は、そこから先を言いよどんだ。

「あいつらキスまでしたらしいぜ。」

まじで！！あの二人が？？？

「うん。双が言ってたんだけど、鋼がかわいすぎて、思わずチュッと。」

いきなり、惚気ですか！

「そうみたいですネ。」

私は、思わず言ってしまった。

「それにしても、男って自分の欲望だけで行動してるよね。」

「だって、男ですもの。」

うぜい。しかもなぜ、オネエ言葉??

「それに、俺だって男なんだけど。」

慎が言う。私が寝ていたベッドにみをのりだすようにして近づいてくる。

「それで、土曜日の返事がほしいんだけど。」

このタイミングですか！！

私は、「付き合わない」と決めていたはずだ。でも、今本当にこの人が愛しく思える。

言ってるほうも、恥ずかしいんだろう。耳まで真っ赤だ。私は決めた。

「うん、付き合おう。私も好きだよ、慎の事。」

ゴメンね、那智。

でも、彼だけは譲れない。

本当にゴメン。

決心（後書き）

お久しぶりです。

パソコンがようやく復活しました！！

これからも頑張ります。

大好きな人

「那智、ゴメン。本当にゴメン。なかなか言い出せなくて。。。」

昨日、何回も練習したこの言葉を繰り返して、私は学校へと向かっていった。

私にも、生まれて初めて彼氏ができた。ただ、問題が一つ。その人は、私の友達の想い人だった。

「えっ、今なんて。」

「だから、慎と付き合うことになったって、言ったんだけど」
最後のほうは、ほとんど聞こえない。那智の反応を待った。

「…………。本当！！？おめでとう、良かったね。さちちゃん！！」

予想していた反応と、全然違うんですけど。

「実はね、私にもようやく好きな人ができたんだ。ようやく、慎の事忘れられそうだよ。」

やっぱり、少し意味が分からない。

「那智、今も慎の事が好きなんじゃ？」

「うん、好きだったよ。さちが慎のこと好きだって知るまでは。」

私は、ものすごくびっくりした。

「知ってたの??」

那智は、さも当たり前のような顔をして、

「誰でもわかるよ。」

私は、顔が赤くなったのが分かった。

「つーのは、冗談。全部鋼から聞いた。最初は、さちを殺そうかとも思ったけど、そんなことできるわけも無く

どうしようかと思ったけど、さち見てたら私があきらめたほうがいいと思っちゃたりして。。。」

那智の目に涙がうつすら溜まっていく。彼女は、きっとまだ慎のことが諦めきれていないのだろう。

でも、彼女は私のことを上辺だけでも祝ってくれている。

「ありがとう。本当にありがとう。」

彼女への精一杯のお礼だった。たった、これだけしかいえなかった。私の目には涙が溜まっていて那智の顔が見えなかった。

私の足に水滴が落ちた。私のものではない。他の誰かのもの。

その人は、私の前から走り去っていった。

私も走っていた。

あの日の屋上に。彼がいることを願って。

屋上のドアを開けると、

「よっ、って何泣いてるんだよ!!?」

彼がいた。

私は、彼の目の前で泣いた。彼女のことを話し、今してきたことを話した。

彼は、優しい目をしていた。

「頑張ったな。」

そういつてくれた。優しい目をして、優しい手で頭をなでてくれた。

那智、本当にごめん。

許してくれとは言わない。

でも、私には、彼しかいなかった。

彼だけだった。

私は、那智にも他の誰よりも彼を愛するよ。きっと。

那智に、取られないように。

慎、大好きです。

こんな貴方が私と付き合ってくれるのは嘘みただけど、本当にありがとう。

音にのせて。

私の思い、貴方の元に。

大好きな人（後書き）

終わりが見えてきました。
最後まで、お付き合いください。

後奏（前書き）

コンクールまで後数日。

私たちは、死ぬ気でがんばった。。。

後奏

ようやく、私たちの恋の出来事は終わった。

いろいろあったが、一応ハッピーエンドとなった。

私と那智の間には、まだギクシャクとした雰囲気が残っているが、それなりにうまくやっていつている。

私たちは、大会でいい賞をもらえるように一生懸命練習した。

本番当日。

私たちは最高の演奏をした。今までにないほど。

「ああ、終わったね。」

「おう。疲れたな」

あの、みんなで泣いたコンクールから、一日。

私は慎の部屋で慎と二人で居る。

コンクールの結果は、一番いい金賞をもらえたが、全国へ行くことはできなかった。

3年の先輩たちの吹奏楽部としての日々は終わった。

2年後私たちもあんなふうに泣く事ができるのか微妙だ。

「なあ。」 慎が私の目を見て言う。

「何？」いつもの調子で答える。

「俺、お前のことめっちゃ好き。」

私の顔は、真っ赤になった。

「はあ？いきなり何・・・？」

「だから、お前は俺の事好きなのかなと思って。」

こうゆう時の慎はかわいい。勇気を振り絞っていったのだろう。私に負けず劣らず真っ赤だ。

「そんなの、当たり前じゃない。。。。」

「ちゃんと、口に出していつてほしい」

分かったよ、分かりましたよ。

「好きです。。。。」

「俺も」

「それは、さっき聞いた。」

私たちは笑いあった。生きてきた中で一番の幸せな時間。

音にのせて 私の思い あなたのもとへ きっと届く

信じたとき きっとそこでは確かな愛を見つけることができる。

私はそう思う。

後奏（後書き）

とうとう、長い長い連載が終了します。

今まで読んでいただいた方、ありがとうございます。

感想・評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4418a/>

音にのせて

2011年1月28日13時15分発行